



PRESS RELEASE

岡山大学記者クラブ

文部科学記者会

科学記者会

御中

令和 7 年 7 月 30 日

岡 山 大 学

オミクロン株期のコロナ後遺症診療～半数以上で 180 日以上 of 長期通院が必要～

◆発表のポイント

- ・岡山大学病院のコロナ後遺症外来を受診した患者のうち、半数以上(52.2%)が後遺症の初診から数えて半年(180 日)以上の長い通院期間を要したことが分かりました。
- ・長期通院が必要な患者は男女比では女性の割合が多く(59.4%)、3 つ以上の多くの症状を有する患者の割合も、女性の方が多いことが分かりました(男性:48.4%、女性:54.7%)。特に女性では倦怠感・睡眠障害・記憶障害・しびれが多く、男性では倦怠感・頭痛が多くみられました。
- ・長期通院が必要な患者では、初診時の身体的・精神的疲労、生活の質、抑うつを示すスコアがすべて重症でした。

岡山大学病院 総合内科・総合診療科の櫻田泰江医員と、岡山大学大学院医歯薬学総合研究科総合内科学の秋山博史大学院生、岡山大学学術研究院医歯薬学域(医)総合内科学の大塚文男教授らのグループは、岡山大学病院のコロナ・アフターケア外来(コロナ後遺症外来)を受診した患者の通院期間を検討し、症状の長期化に関わる臨床的な特徴についての研究を行いました。その結果、半数以上(52.2%)が初診から数えて半年(180 日)以上の長期通院を必要としていること、また長期通院を要した患者では訴える症状の数も多く、特に男性より女性の方が多いことが分かりました。女性であること、また 3 つ以上の多くの症状を持っていることがコロナ後遺症の長期化につながると明らかになり、継続的な診療をすることの重要性が再認識されました。

この研究成果は 2025 年 7 月 11 日、国際学術雑誌「*Journal of Clinical Medicine*」に掲載されました。

◆研究者からのひとこと

今回の調査で女性の方が辛い症状で悩んでいる方の割合が多いことが明らかになり、同じ女性として寄り添う姿勢で診療することが大事だと感じています。後遺症への理解が広がり、病態解明や治療法の発展に寄与できるよう、これからも研究を続けていきたいと思っています。



櫻田医員

コロナ感染を契機に、治療が長引くコロナ後遺症となる可能性もあるため、感染のピークは過ぎていても、それぞれの視点で、感染対策への意識を持つておくことが大切です。



大塚教授



PRESS RELEASE

■発表内容

新型コロナ罹患後症状、いわゆる「コロナ後遺症」では、さまざまな症状を呈しますが、その病態の詳細は未だ解明されていません。岡山大学病院のコロナ・アフターケア(CAC)外来では、2021年2月15日の開設からこれまで1200人を超える新型コロナ後遺症患者を診療してきました。本研究では現在主流となっているオミクロン株の感染者について、通院期間の解析により、症状の長期化に関わる因子とその臨床的特徴について検討しました。

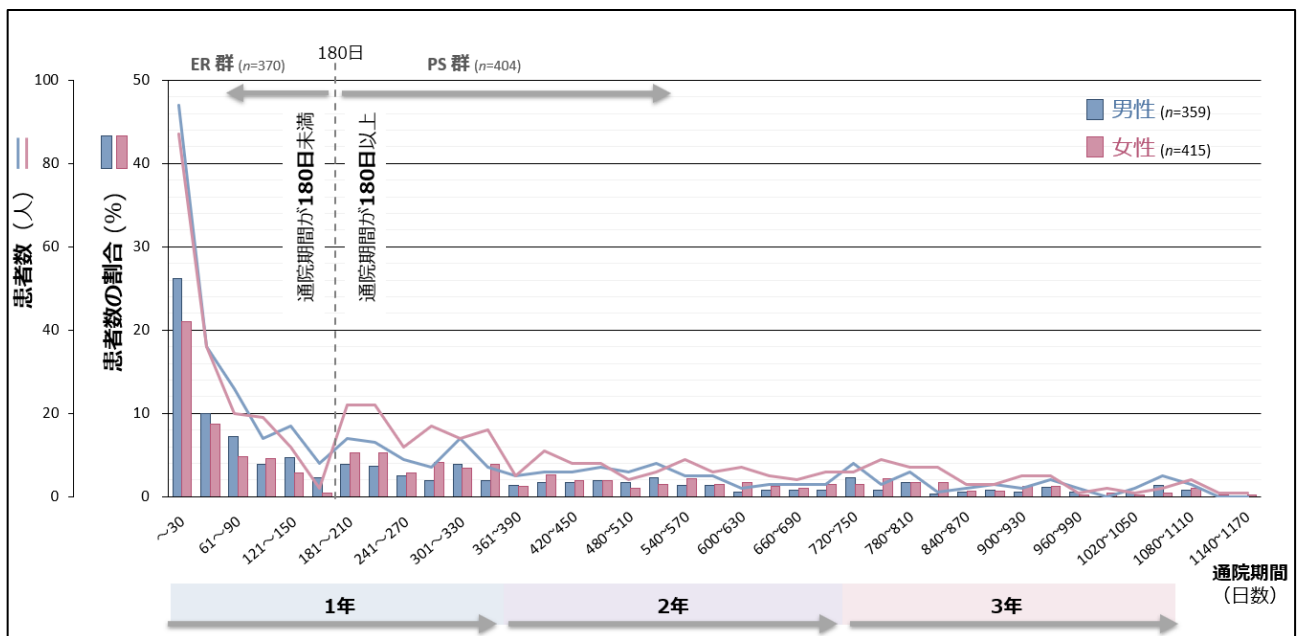


図1：コロナ後遺症患者の外来通院期間とその割合（オミクロン株期以降の感染）

<研究の内容>

岡山大学の研究グループは、コロナ後遺症でCAC外来を受診した患者のうち、オミクロン株感染による後遺症患者を対象として、通院期間の調査を行いました。初診日から起算して通院期間が180日未満の患者を早期回復群(Early Recovery 群:ER 群)、180日以上を患者を持続症状群(Persistent Symptom 群:PS 群)に分けて、それぞれの臨床上的特徴を比較する研究を行ったところ、2022年2月から2024年10月までの間にCAC外来を受診したオミクロン株の新型コロナウイルス罹患後症状(コロナ後遺症)患者774人のうち、長期通院したPS群は404人(52.2%)、早期回復したER群は370人(47.8%)でした(図1)。

男女比では、ER群は女性:47.3%、男性:52.7%であるのに対し、PS群は女性:59.4%、男性:40.6%、と、PS群で女性の比率が高くなっていました。年齢ではER群40歳、PS群42歳と男女による大きな差はみられず、ワクチン接種回数にも統計的な差はみられませんでした。PS群の女性には、ER群に比べて倦怠感、睡眠障害、記憶障害、しびれの症状が多くみられ、PS群の男性では、倦怠感、頭痛の症状が多く、いずれも統計学的な有意差を認めました(図2)。

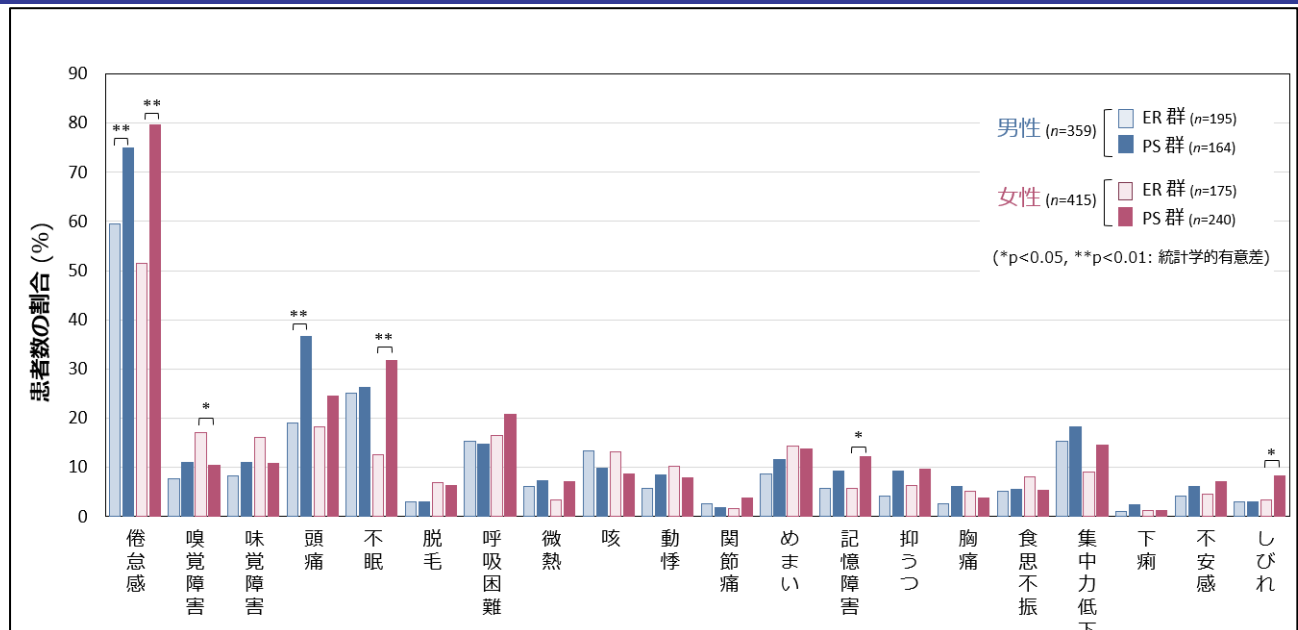


図 2：コロナ後遺症による長期通院者の症状と性差（オミクロン株期以降の感染）

さらに症状の数に着目したところ、3 つ以上の症状を呈する患者の割合が、PS 群では男性で 48.4%、女性で 54.7%であり、男女ともに ER 群よりも比率が高く、統計学的にも有意差を認めました。初診時の身体的・精神的疲労、生活の質(QOL)、抑うつを示すスコアを評価すると、全ての項目で PS 群が重症でした。

※本研究の限界として、通院期間は岡山大学病院のコロナ・アフターケア外来への通院期間を示しており、通院期間と症状の持続期間とが一致しないケースも含まれています。

<社会的な意義>

当院のコロナ・アフターケア外来受診患者のデータからは、52.2%が半年以上の長期の通院期間を必要としていることがわかりました。コロナ後遺症の影響は、日常生活にとどまらず、就労、就学、家計にまで波及し、暮らし全体に大きな負担となっています。コロナ後遺症の方々が安心して生活できるよう、社会全体で正しい理解を深め、心のケアや医療体制、就労・就学支援などの体制を充実させていくことが、今後さらに重要になると思われます。

■論文情報

論文名：Symptomatic trends and time to recovery for long COVID patients infected during the Omicron phase.

掲載紙：Journal of Clinical Medicine

著者：Hiroshi Akiyama, Yasue Sakurada, Hiroyuki Honda, Yui Matsuda, Yuki Otsuka, Kazuki Tokumasu, Yasuhiro Nakano, Ryosuke Takase, Daisuke Omura, Keigo Ueda, Fumio Otsuka

DOI：10.3390/jcm14144918

URL：https://doi.org/10.3390/jcm14144918



＜お問い合わせ＞

岡山大学病院 総合内科・総合診療科

医員 櫻田 泰江

岡山大学学術研究院医歯薬学域（医） 総合内科学

教授 大塚 文男

（電話番号） 086-235-7342

（FAX） 086-235-7345



岡山大学
OKAYAMA UNIVERSITY



岡山大学は持続可能な開発目標（SDGs）を支援しています。

